

ターン譲渡の方略としての「繰り返し」と「問い」

森 恵理香・前原 かおる・大浜 るい子

'Repetition' and 'Question' as a Strategy of Turn-giving

MORI, Erika・MAEHARA, Kaoru・OHAMA, Ruiko

キーワード：ターン譲渡、繰り返し、問い、場面

0 はじめに

大浜(1998)は、日本人と留学生の間の自由会話を分析し、両者の談話展開の仕方には顕著な違いがあったことを報告している。留学生が「問いと答え」の連鎖によって展開させるのに対し、日本人は「物語^中と繰り返し」によって展開させる傾向にあるという。「答え」と「物語」の対立については、既に Watanabe(1993)や斉藤他(1997)らの観察があるが、大浜(1998)のユニークな点は、対話相手からの働きかけがそれらに対応する形で対立していることを指摘したことである。すなわち、答えや物語が語られることになるそれぞれのターンは、対話相手が譲渡したものであり、前者に対しては「問い」という形で、後者に対しては「繰り返し」という形で譲渡がなされることを明らかにした。

問いは、相手に答えることを明示的に要求し、しかも答える内容までも制限するという点で、聞き手が話し手を制御する方略である。一方の繰り返しは、次の発話内容を限定するよりは、むしろそれ以前の発話内容に縛られているという点で、話し手を制御しない方略である。これを話し手の側から見ると、聞き手によって制御される問いでは、話し手が従属的にそれに答えることで談話は展開するが、聞き手によって制御されない繰り返しでは、話し手の方で自らすすんで情報を提供していかないと談話は中断してしまう。

社会によって好まれる方略は異なるが、どちらの方略にもそれに見合った対応の仕方(答えと物語)がその社会の中に整えられているというわけである。それぞれの組み合わせが作る談話展開を「聞き手主導」「話し手主導」と呼び、日本人の談話展開は話し手主導であると結論づけている。

本研究は、この成果をふまえ、自由会話以外のさらに多くの談話タイプについて観察し、そこにも同

様の傾向が認められるかどうか、そして本当に「繰り返しと物語」が日本人の談話展開を特徴づけるものであると主張できるのかどうか、考察するものである。

1 資料の概要

分析資料には、資料収集を目的として1997年11月広島大学内で実施された日本人学生同士10組、留学生同士10組によるロールプレイ談話を録音、文字化したものを用いている。留学生の日本語能力は上級以上で、ロールプレイ実施に問題はなかった。出身地は、中国、台湾、タイ、韓国、マレーシア、オランダ、アメリカと様々であるが、ここでは日本人学生との相違を明らかにすることを目的とするため、一括して非日本人学生と位置づけている。以下の談話例では、日本人学生はJで、留学生はその出身地のイニシャルによりそれぞれC,W,T,K,M,H,Uと表すことにする。

ロールプレイヤー達(2人1組)は、各組とも「依頼」「謝罪」「勧誘」「情報提供」「自由会話」の5場面に関して、この順序で連続して会話を行うよう指示された。よって、資料とした談話は、日本人側、留学生側それぞれに各場面10談話ずつの合計100談話である。ロールプレイはいずれの場面も友人同士という設定のもとで行われ、すべて会話はAの役割の側から始めるよう指示された。それぞれの役割カードの指示内容は、概略以下のとおりであった。

依頼場面

役割A：卒論のための調査への協力をBに依頼し、日時や場所を約束する。

役割B：Aから頼みたいことがあると言われる。

謝罪場面

役割A：Bから借りたCDをなくしてしまい、Bに謝罪する。

役割B：CDを貸しているAに話しかけられる。

勧誘場面

役割A：忘年会の二次会にBを誘う。

役割B：忘年会の二次会に誘われるが、あまり
気のりがしない。

情報提供場面

役割A：友人と食事をする場所を探しており、
Bに店を紹介してもらう。

役割B：友人と食事をする場所を探しているA
に、店を紹介する。

自由場面

役割A：夏休み明けに久しぶりにBに会って、
休み中のことを自由に話す。

役割B：夏休み明けに久しぶりに会ったAから
話しかけられる。

2 本研究で扱う「問い」と「繰り返し」

「問い」も「繰り返し」も、相手にターンを譲渡するために発せられる働きかけであるという点では共通しており、表現形式上は区別されない。文末に「か」を伴う文もあれば、名詞（格助詞がついたものも含む）や副詞のみの発話もある。また形容詞や動詞の終止形で終わるものや、それらに「ね」「よ

ね」などの終助詞がついたものも見られる。両者の違いは、その働きかけが直前^{#2}の発話内容から独立しているか否かにある。独立しているものを「問い」(例(1))とし、独立していないものを「繰り返し」とした。「繰り返し」には「完全なオウム返し」(例(2))、「部分的な言い替え」(例(3-a))、「表現は異なるものの論理的必然的な帰結内容のもの」(例(3-b))が含まれている。

また、ターン譲渡はないが、分析対象に加えたものに、例(4)(5)のようなものがある。ターン譲渡の可能性を捨て切れないことがその理由である。^{#3}

但し、本研究では「問い」も「繰り返し」もターン譲渡の方略としてとらえているので、特に「繰り返し」については、形式的に相手の発話を繰り返しているものであっても、以下の例(6)(7)(8)のようにターン譲渡を目的としないものは分析対象から除外した。

3 調査結果

表1は、2であげた基準に従い談話中から拾い出した問いと繰り返し数を、個人別にまとめたものである。各列の右端には、当該発話者の働きかけ（問い+繰り返し）全体に占める繰り返しの割合を繰り返し使用率として示した。

(1) J3:ちょっと(中略) どっかいいお店知らない?

J4: ああ、どんなのが好きですか?

(2) J16:ちなみに彼女の趣味は? フレンチ

J15: フレンチ だから俺困ってるんだよ

(3) J7:お中元のバイトと(中略)両方ずっとやって めっちゃ働いた

J8: (a)働いたね (b)儲けたね

(4) J1:夏休みどうしとったん?

J2: 夏休みねえ、ずっとあのね、免許ととったんよ

(5) J6:君こそ、どこ行っとったん? バイト? バイト何しよったん

J5: バイトだったんかも

応答発話に直前発話の一部を利用している場合

(6) C:じゃ一緒にどっか異人館とか遊びに行った?

W: あ一緒にじゃなくて、私一人で

YES-NO質問文への答えになっている場合

(7) J8: えー何も言わんに言ってくれたん?

J7: 言ってくれた

共感しあっている場合

(8) J7:でも学校ももうすぐ始まるし な、だるいな

J8: そー、だるいな

表1(a) 日本人の繰り返し数・質問数・繰り返し使用率(%)

	依頼			謝罪			勧誘			情報提供			自由		
	繰り返し 返し	質問	使用率	繰り返し 返し	質問	使用率	繰り返し 返し	質問	使用率	繰り返し 返し	質問	使用率	繰り返し 返し	質問	使用率
K1	5	5	50	1	1	50	1	1	50	1	3	25	3	4	42.9
K2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	2	1	66.7	0	2	0
K3	1	3	25	0	3	0	1	5	16.7	0	2	0	1	3	25
K4	6	3	66.7	0	0	0	0	0	0	2	1	66.7	3	9	25
K5	1	5	16.7	0	5	0	0	1	0	5	5	50	2	2	50
K6	2	4	33.3	0	2	0	3	2	60	2	1	66.7	3	2	60
M1	2	5	28.6	0	1	0	0	2	0	1	4	20	0	5	0
M2	1	3	25	2	1	66.7	0	0	0	2	1	66.7	2	2	50
T1	3	6	33.3	3	0	100	1	2	33.3	0	2	0	1	3	25
M3	2	10	16.7	0	1	0	1	2	33.3	0	2	0	0	3	0
W1	0	6	0	0	0	0	0	1	0	1	2	33.3	0	4	0
C1	1	3	25	0	0	0	0	1	0	3	2	60	4	1	80
W2	2	4	33.3	2	5	28.6	4	6	40	3	8	27.3	6	6	50
C2	1	5	16.7	0	10	0	3	6	33.3	1	6	14.3	2	17	10.5
W3	0	3	0	0	3	0	0	4	0	3	2	60	2	4	33.3
W4	2	1	66.7	0	0	0	2	0	100	0	2	0	2	8	20
C3	1	8	11.1	1	3	25	0	1	0	3	8	27.3	6	11	35.3
W5	4	4	50	0	0	0	2	0	100	1	0	100	2	2	50
U1	6	12	33.3	0	3	0	0	3	0	4	5	44.4	5	4	55.6
H1	6	9	40	1	4	20	6	3	66.7	3	8	27.3	0	4	0

表1(b) 留学生の繰り返し数・質問数・繰り返し使用率(%)

	依頼			謝罪			勧誘			情報提供			自由		
	繰り返し 返し	質問	使用率	繰り返し 返し	質問	使用率	繰り返し 返し	質問	使用率	繰り返し 返し	質問	使用率	繰り返し 返し	質問	使用率
J1	1	2	33.3	0	0	0	0	3	0	1	3	25	3	2	60
J2	4	3	57.1	1	3	25	2	1	67.7	1	3	25	2	1	66.7
J3	1	8	11.1	0	0	0	0	2	0	0	2	0	1	4	20
J4	1	2	33.3	0	0	0	0	0	0	2	3	40	1	1	50
J5	0	2	0	0	0	0	0	2	0	1	3	25	2	4	33.3
J6	3	8	27.3	0	4	0	1	4	20	3	4	42.9	5	5	50
J7	2	6	25	0	0	0	0	0	0	0	6	0	1	3	25
J8	4	1	80	0	7	0	5	3	62.5	4	2	66.7	4	6	40
J9	0	6	0	0	3	0	0	4	0	1	4	20	1	2	33.3
J10	2	2	50	0	1	0	2	1	66.7	4	0	100	0	1	0
J11	1	2	33.3	0	0	0	0	4	0	3	5	37.5	1	2	33.3
J12	3	1	75	0	4	0	0	1	0	0	5	0	1	0	100
J13	2	8	20	0	1	0	0	4	0	1	4	20	4	11	26.7
J14	2	2	50	0	2	0	1	4	20	4	7	36.4	5	4	55.6
J15	5	7	42.7	1	2	33.3	3	6	33.3	2	15	11.8	2	5	28.6
J16	1	0	100	1	1	50	0	0	0	3	2	60	0	1	0
J17	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0
J18	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	50	1	1	50
J19	0	7	0	0	0	0	2	1	66.7	1	4	20	1	4	20
J20	1	2	33.3	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	2	33.3

4 分析

表2は、日本人と留学生の場面ごとの平均繰り返し使用率を示したものである。その際、ロールプレイによる資料であることを考慮し、役割別に集計した。

我々の関心事である「いかなる場面でも日本人に繰り返しが多いか」という視点から眺めると、次の

ように言わなければならない。

ロールプレイの役割Aでは、いかなる場面でもむしろ留学生に繰り返しが多い。

ロールプレイの役割Bでは、日本人と留学生のどちらが繰り返しが多くなるかは場面によって異なる。

この観察の妥当性を調べるために、談話参加者を繰り返しの多い参加者、少ない参加者に分類し、各

表2 役割別場面別繰り返し使用率(%)

場面参加者		依頼	謝罪	勧誘	情報提供	自由
日本人	役割A	19	14.3	15.6	17.5	29.6
	役割B	50	8	40.7	44.9	47.6
留学生	役割A	26.9	22.6	21.2	33.9	36.1
	役割B	35.2	14.3	54.8	40	26.5

場面において留学生と日本人の間でそれぞれ的人数間に有意な差があるか、 χ^2 検定を行った。その際、談話内での「繰り返し」使用率が30%以上である談話参加者を「繰り返し多用者」、30%未満の参加者を「繰り返し非多用者」とした。使用率の高低を分ける基準を30%に定めたのは、日本人、留学生ともにその平均が30%程度であったためである。なお、「問い」数、「繰り返し」数ともにゼロである場合は無反応とみなし、分析の対象には加えなかった。

検定の結果、ロールプレイの役割 A に関しては、いかなる場面でも日本人と留学生の間に有意な差は認められなかった。一方、ロールプレイの役割 B に関しては、いずれも傾向差²⁴ではあるが、依頼場面と自由会話場面では日本人に繰り返し多用者が多く、勧誘場面では留学生に繰り返し多用者が多いという結果が得られた(依頼df=1, $\chi^2=1.75994$, $P<.20$; 勧誘df=1, $\chi^2=1.88616$, $P<.20$; 自由df=1, $\chi^2=1.87500$, $P<.20$)。

役割 A と役割 B でこのような違いがでたのは、分析資料がロールプレイ談話であり、ロールプレイカードにおける指示が役割によって大きく異なったことに起因していると思われる。談話は常に役割 A から始めるように指示され、また談話展開についてもあらかじめ方向づけがなされていたため、役割 A はそれに沿う形で談話を終結へ導く責任をもたせられたのではないと思われる。その意味で行動の自由は小さく、自然な行為者よりは、むしろ演技者に近かったのかもしれない。それに対して役割 B には、最初の状況設定のみで、行動上の規制は少なかった。そのため、自由にふるまえる余地が大きく、自然な談話者に近い状態でプレイできたのではないと思われる。ここでは以上のことを考え合わせ、役割 B に見られた相違点に注目したいと思う。

役割 B に関して結論的には、次のように言える。

- (1) 繰り返しの多い行動は、日本人のみに特徴的なことではなく、留学生にも見られる。
- (2) 自由会話場面については、今回のデータでも

大浜(1998)の指摘通り、日本人に繰り返し多用者が多く、留学生のふるまいとは異なることが示された。

- (3) (2)と同様の傾向が見られた場面は依頼場面であった。
- (4) 逆に勧誘場面では留学生に繰り返し多用者が多く、日本人とは異なるふるまいであることが示された。

5 場面についての考察

4の結果から、日本人も留学生も、いかなる場面でも常に同様のふるまいをするのではなく、場面によってふるまいが異なるということが示唆された。特に注目すべきは、日本人のみならず留学生も働きかけの手段として繰り返しを多用する場面があるという点である。では、ここからただちに日本人と留学生の言語行動に違いはないという結論が導き出されるのだろうか。おそらくそうではないだろう。以下では場面を特徴づけている対話者間の関係に注目し、それがターン譲渡のための働きかけ回数に対応することを明らかにする。その上で、場面そのものの持つ対立・非対立の関係が、各対話者のとる働きかけの方略に関係しているという仮説を提案する。

先に見た繰り返し多用者(繰り返し使用率30%以上)と非多用者(繰り返し使用率30%未満)に関してその人数を場面ごとに比較すると、図1のようになる。

日本人では、場面が左から右へ移行するに従って繰り返し多用者数が減少する。それに対して、留学生では、謝罪場面を除いてそれが増加している(図1の黒塗りの部分)。

ところで、これら5場面は繰り返し多用者数において違いが見られるだけではなく、そもそもターン譲渡を目的とした働きかけ総数自体に大きな違いが見られた(図2参照)。

図2から明らかのように、自由、依頼、情報提供は働きかけの多い場面であり、勧誘、謝罪は働きか

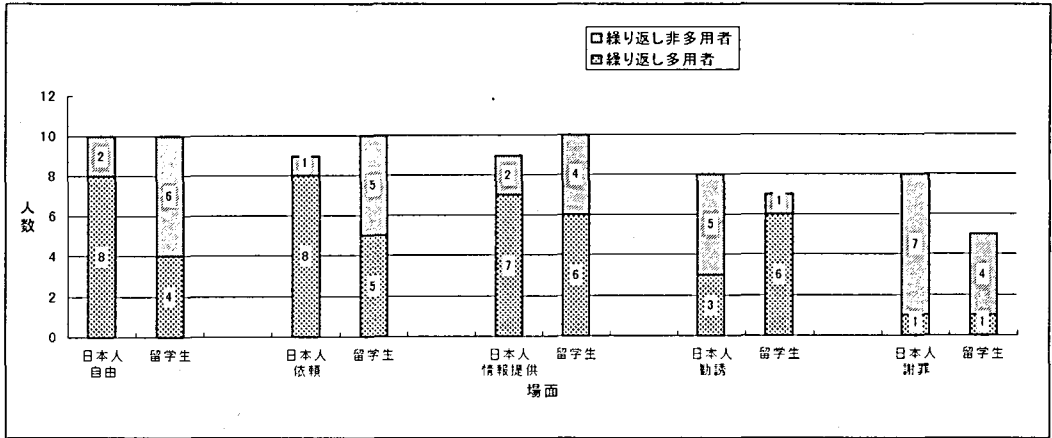


図1 繰り返し多用者数と繰り返し非多用者数の場面別比較

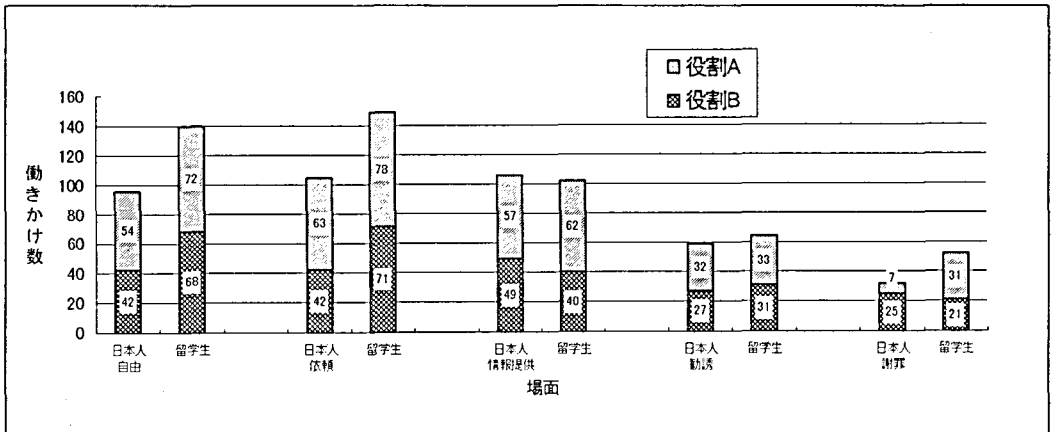


図2 役割別に見た場面別働きかけ数比較

けの少ない場面である。それでは、場面には働きかけをするようしむけたり、あるいは抑制したりする要因があるのだろうか。場面と働きかけ数の関係が日本人と留学生で同傾向であることを考えると、その要因は社会文化的なものではなく、場面に固有な性格によるものと考えられる。

ロールプレイカードの指示内容から、場面の性質を決定する要因の一つではないかと推察されるのは、談話中の一方の参加者の意向が、他方の参加者の意向に沿うものになっているか逆らう形になっているかである。たとえば、勧誘の「Aが二次会に誘うが、Bは気乗りしない」という設定では、「Aは誘いたいBは断りたい」というように、一方の対話者の意向が他方の対話者の意向に逆らう形になっている。それに対し、情報提供の「店を紹介してもらいたい

AにBが店を紹介する」という設定では、対話者間に意向の対立は見られない。談話参加者のこのような関係に注目して場面を分類すると、勧誘場面は対立場面、情報提供場面は非対立場面と言えるだろう。同様に、他の場面を見ていくと、我々の依頼場面は非対立関係にあると考えられる。確かに、依頼も内容次第では対立的関係を作りうるが、ここでは卒業論文のための調査協力という、学生たちにとって日常的に負担の小さいものであったためか、ほとんどの談話で依頼がなされるとただちに協力する旨伝えられている(例(9)参照)。また自由場面は夏休み中の互いの生活ぶりを語り合うのみで、対立的関係はない。一方、謝罪はその行為の性格上、対立的関係がある。ここでは大事にしていたCDをなくされるという場面設定だが、ロールプレイヤー達は最

(9)M1: M2さん あのちょっとね、頼むものがあるんですよー あの今卒論のためにアンケートを

M2: はい 何ですか

M1: やりたいと思うんで、今は大学生の意識調査をやりたいと思うから、協力してくれる?

M2: ああいいですよ

M2: (続く)

(10)J13: あ、J14ちゃん、もーちょっと待って この前ね 借りてたCDをね なくしてしまった

J14: え何何何 うん うん

J13: なんだ ごめんない ごめん

J14: えー、嘘ー いえー、嘘、えー、まじ、えー、あれめちゃめっちゃ気に入ってるやつ

J13: どうしようどうしよう、じゃあ買って 買って返すので ちょっと待ってくれる?

J14: なのにー うん えーうーんうー

J13: いや、でも何とかして買って返すから

J14: んいいけど、うーんでもお金ないって言ってなかった? あほんま、あでもあの

J13: わかったー、ごめんねー

J14: カセットあるけん、急がんでいいよ、じゃお金ある時でいいけん ううんええよ

後にはそれを許したり妥協点を見つけたりするもの、そこに至るまでは対立的関係が認められる(例(10)参照)。

談話内で協力的な立場をとるか、対立的な立場をとるかには人間関係や個人的な関心や打算、負担の量など多くの要素が絡むものであり、ある行為場面を対立的か非対立的かに明確に二分することは難しい。その意味で、様々な要素が絡み緩やかな連続体を形成すると考えるのが適当であり、図1において自由、依頼から情報提供、そして勧誘、謝罪場面へと、繰り返し多用者数が連続的に推移していったこと、そして、自由と依頼では日本人に、そして勧誘では留学生に繰り返しが多く見られる中で、その中間に位置する情報提供では日本人と留学生に違いが見られなかったことは、十分あり得ることであると思われる。

いずれの場面も10談話ずつという少数の比較なので、結論は今後の研究に委ねなければならないが、今回扱った談話に関しては、意向の対立がない場面では働きかけ数が多く、意向の対立が見られる場面では働きかけ数が少ないといえる。それに日本人と留学生のそれぞれで繰り返し多用者の多かった場面を重ね合わせてみよう。すると、働きかけの多い場面、すなわち非対立場面においては日本人の方が留学生より繰り返し多用者が多く、働きかけの少ない場面、すなわち対立場面においては日本人より留学生の方が繰り返し多用者が多いというこ

とが分かる。

それでは、日本人も留学生も、各場面における意向の対立・非対立によって全く逆の方略を使い分けているということだろうか。以下では、この点について検討する。

6 場面と方略の関係

本研究はその出発点に、日本人と留学生の間には談話展開の仕方に違いがあり、展開を誘導するターン譲渡の方略として、日本人は「繰り返し」を、留学生は「問い」を使用する傾向にあるという大浜(1998)の主張があった。しかし、本研究から明らかになったことは、その傾向は少なくとも対話者の意向が対立しない関係においてであって、対立する関係では逆になるということである。これは、一見大浜(1998)を否定する結果のようである。しかし、それは対立関係においてターン譲渡の働きかけそのものが少なくなる中でそのように見えているだけで、そこで選択される方略の違いではなく、それを支配している社会文化的な行動原則はいずれの場面でも首尾一貫したものであることを示したい。

先に見たように、意向の対立が見られる場面ではターンの譲渡のための働きかけが大幅に減少した。問題は、その働きかけの減少に、問いと繰り返しのうち、どちらの方略の減少がより大きく関わったかということである。もし、日本人と留学生がともに問いと繰り返しという2つの方略を同じ割合で減少

させたのであれば、非対立場面と対立場面で繰り返し多用者の比率が逆転することはありえない。実際には、日本人と留学生との間で繰り返し多用者の比率が逆転したわけであるから、日本人では繰り返しが、留学生では問いがより多く減少していなければならないことになる。

実際に、勧誘場面を依頼場面、自由場面それぞれと比較し、どちらの方略の減少が働きかけ総数の減少を引き起こしているかを個人別に調べると、確かにそのような結果になっている(表3参照)。

表3 自由・依頼場面に対する勧誘場面での問い/繰り返し数増減比較(各記号は、-:減少、+:増加、*:変わらないことを示す。)

(1)日本人

談話参加者	自由場面との比較		依頼場面との比較	
	繰り返し	問い	繰り返し	問い
J2	*	+	-	*
J4	-	-	-	-
J6	-	-	-	-
J8	+	-	+	+
J10	+	*	*	-
J12	-	+	-	*
J14	-	*	-	+
J16	*	-	-	*
J18	-	*	*	+
J20	-	-	-	-

(2)留学生

談話参加者	自由場面との比較		依頼場面との比較	
	繰り返し	問い	繰り返し	問い
K2	*	-	*	-
K4	-	-	-	-
K6	*	*	*	-
M2	-	-	-	-
M3	+	-	+	-
C1	-	*	-	-
C2	+	-	+	+
W4	*	-	*	-
W5	*	-	-	-
H1	+	-	*	-

自由場面との比較でも、依頼場面との比較でも、日本人では「繰り返し」を減らした人の方が、留学生では「問い」を減らした人の方が多いことが分かるだろう(表の網掛け部)。日本人が「繰り返し」を、留学生が「問い」をより多く減少させるということから明らかになることは、非対立場面でもより好まれる方略それ自身が、対立場面での働きかけの減少に関わっているということである。

日本人が繰り返しを控えるということは、繰り返しによって成立していたものを拒否することである。すなわち、非対立場面でも相手の自由にさせていた物語をもはや歓迎していないことを示すことになる。留学生が問いを控える時は、問いによって実現されていたものがもはや不要であることを示すことになる。すなわち、問いへの応答、言い換えれば相手からの情報提供を不要としているのである。歓迎されない物語や不要な情報とは、我々の勧誘場面而言えば、二次会の面白さの強調や二次会から抜けるタイミングの提案など、次々発せられる勧誘強化のための理由や事情説明のことである。このように考えると、繰り返しの減少(日本人の場合)、問いの減少(留学生の場合)は、二次会への参加をためらう者の行動として納得できる。

では、このようなふるまいを受ける対話相手の方はどのように行動するのだろうか。ここでもう一度、日本人はターン譲渡の方略として繰り返しを、留学生は問いを好んで使用してきたことを思い起こさなければならぬ。言い換えれば、日本人は談話展開を相手に委ねることで他者を制御しない方略をとる傾向があり、留学生は相手の発言を問いへの答えに限定するという意味で他者を制御する方略をとる傾向があるということである。具体的に言えば、日本人は歓迎されない物語であることが分かれば、それを控えるだろう。物語をすることは、この勧誘場面で相手を強引に誘うことを意味し、それは「相手を制御しない」方略をとることと矛盾するからである。反対に、問いを向けられなくなった留学生の対話相手は「答え」をする機会は失うが、それに代わって大いに物語を展開し、情報を提供して行くだろう。それが相手を制御する方略であるからである。

同じ資料を別の観点から分析している中川(1998)によると、このような勧誘強化発話は日本人では1談話あたり2.8発話であったのに対し、留学生では4.6発話見られたということである。そして留学生の勧誘強化は相手賞賛型(「君が来ん

ともしあがらんのよ)、意中人物提示型(「P君も来ますよ)、楽しさ提示型(「絶対楽しいぞ)、自己欲求提示型(「Pちゃんに行ってほしい)、拒否理由否定型(「二次会終わったら帰ればいいやん)、連帯行動要求型(「みんな行っとるし)など多岐にわたったことが報告されている。

このように見てくると、対立場面と非対立場面で一見逆の方略がとられたかに見えたことも、実はそれぞれの社会で非対立場面に好んでとられる方略が、対立場面でとられなくなっただけで、それが全体のバランスに影響を与え、見かけ上逆の方略がとられたかに見えたのだと言えそうである。それぞれの社会にはそれぞれに好まれる方略があり、場面に依じて働きかけを活発にする時も控える時も、同じ方略の操作によって調整しているということではないだろうか。

7 まとめ

本研究は、「問い」と「繰り返し」を談話展開に必要なターン譲渡の方略と考えたとき、日本人と留学生で用いる方略に違いがあるかということの問題にしてみたが、当初考えられた「日本人=繰り返し」「留学生=問い」という単純な図式では説明できないことが明らかになった。というのも、現象的に見ると、日本人に問いが、留学生に繰り返しが多用される場面があるからである。しかし、一見そのように見える場面では対話者間に意向の対立があり、それがターン譲渡のための働きかけ自体を控える傾向にあることに注目し、働きかけの減少に問いと繰り返しのどちらが関わっているかを観察すると、日本人は繰り返しを減らすことによって、留学生は問いを減らすことによって働きかけを減少させていることがわかった。すなわち、働きかけを減らすために調整する方略は、彼らが常々好んで用いている方略そのものだったのである。「働きかけに用いる方略」と「働きかけを減らすために用いる方略」が同じ1つの方略であるということが意味することは、それぞれの社会が手にする方略は1つであるということである。本研究の結論としては、次のように言うことができるであろう。日本人と留学生のターン譲渡の働きかけには違いがある。ただし、その違いは外から観察可能な行為それ自体にあるというよりも、むしろ行為を作り出している社会の行動規範の違いであると言えるのではないだろうか。

これらは、今後検証されなければならない。特に

今回ははっきりと違いが明らかになった依頼、自由、勧誘場面については、場面の性格をさらに厳密に設定した上で、多量のデータを観察する必要がある。また本研究で行ったような数量的な扱いだけではなく、自然談話の観察を通して、談話内のどの局面が問いや繰り返しにきっかけになっているか、またそれらが次の発話行動にどのように影響しているかなど、談話構造に照らした分析も必要であるが、それらは今後の課題である。

付記：本研究は平成9年度後期に広島大学大学院に開設された日本語教育学総合研究での課題研究をさらに発展させたものである。受講生や担当教官から貴重なご意見をえた。特に松見法男氏には多くのご助言をいただいた。ここに記して感謝したい。

注

- 1) ここで言う「物語」とは一発話内に複数の情報を含む発言を言う。それに対して「答え」とは問われたことを端的に1情報で返答することを言う。
- 2) 稀に一つあるいは二つ前の発話内容に関わることがある。
- 3) 例(4)が以下に述べる例(6)と異なるのは、直前発話を応答発話の一部として利用したものは考えにくいことによる。
- 4) 本研究で分析された資料は自然談話に近いもので、特にデータ収集のための厳密なコントロールを加えられていないため、有意確率を20%まで引き上げ、傾向差として扱った。

参考文献

- 大浜るい子(1998)「日本人の言語行動 - 談話展開のためのストラテジー」『広島大学日本語教育学科紀要』第8号 97-105.
- 小室郁子(1995)「“Discussion”におけるturn-taking - 実態の把握と指導の重要性 -」『日本語教育』85. 53-65.
- 中川祐治(1998)「勧誘談話における日本人大学生と外国人留学生のパターン比較」『平成9年度日本語教育学総合研究報告書』広島大学大学院教育学研究科発行 77-83.
- 中田智子(1992)「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告 104. 研究報告集』13. 秀英出版 267-302.
- 斉藤みちる・徐愛紅・多田美有紀・大浜るい子

- (1997)「談話分析から見た異文化間コミュニケーション -日本人の言語行動を中心に-」『広島大学日本語教育学科紀要』第7号 185-193.
- ザトラフスキー・ポリャ (1993)『日本語の談話の構造分析 -勧誘のストラテジーの考察-』くろしお出版
- Sachs, Harvey / Schegloff, Emanuel A. / Jefferson, Gail (1974): "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation" *Language*, 50, 696-735.
- Schegloff, Emanuel A. / Sachs, Harvey (1973): "Opening up Closing." *Semiotica*, Vol.8. 289-382. 北沢裕・西坂仰訳 (1989)「日常性の解剖学」マルジュ社 177-241.
- Watanabe, Suwako (1993): "Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions." In: D. Tannen (ed.) *Framing in Discourse*. Oxford Uni. Press. 179-209